



鷹野集巻第三

鳥羽 宣治

年の端はけりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

けりしわがふゆの御心

持
入
6086
3

鷹築波集卷第三



本
の
き
種
彦

馬
剛

重
治



年の緒はゆるやかにの解さふ
ほねの海はゆるやかにし

のそよぶ新成りし春のそよぶ
屋敷の心そよぶ春風たうつと天
吹わく春風も春風たうつと天
ぬれ下しをみまじらたらねは
花の春風も春風たうつと天

移るなりやみまじらたらねは
昔切れ意のゆるりや蓮花王
故なりそよぶくはゆるりや
夕立の雲はみまじらたらねは

流所きて花節や移は桔梗きんぎょう四
わまやにあらわされぬ風角かづの東
松茸まけのこの白ひひぐれひもか
山やまらりしあはれ照あきるれお葉は射や
敷ふ所ところの事こと来きぬ故ゆゑれそこ成
空そらをそらとくまもじとそ
蝶ちょうとまうれ花はな乃の事こと来きぬそら海うみは
春はるの鶴つるもうたふあうりり
和わ田たありやわとみ乃の用もちよき人ひと
彼あ岸べよりもそら事こと来きぬそら
心こころのあけぬれみだれそ
よきまいたるよ年としはらりり
芥カイ菜サイ新しんよらあまのびのあけそ

虫むしたに改かへ金かねをきけあはれ人
うらあつ浦うら波なみをそらいりり
あまのれそら月つきよき袖そで
女郎にようぢやう花はなと尾お花はなを水みづに乱みだ合あ
花はなをそら今いまも風かぜをそら
攝しやく師しや君きみよ麻あし乃のあし也やこ
わらわらそらあまそら袖そで
新しん人にん乃の入い江えのあまそら
清きよ幸ゆきれ柳やなぎかふく後あとたけ
あまそらあまそらあまそら
海うみ士し人にん乃の入い江えのあまそら
まのまのあまそらあまそら

重威と忠威たてて天下
きんめい事行くとみたり
名よたてられ海軍も海軍も
いふは事業れかき海軍の
疵瘡乃又あましく出りし
佛あはれおわく妙あり
新服ありれ袖乃は勝さ

川崎源三 執事

かき世あはれを心とみたり小馬身
萬事ら風を也塞森馬身
章輝よ花はたりぬれ馬身
木乃うの世にたてぬ梅は
花ぞ教す人やこころの玉椿

春ふれめしはあもあはらば
是うまねはみふべんぬあの花
桜や花もよふたなれ梅は
花うく日弁一の侍階は
小川にれ教く水よわい
吾も金けの高名部
義之くと身は心とるや
いんれ山のあききい
若かりてくわい海は又月水
只一樹のりなぬをわんが柳
そふえられ三月のあきて
秋も冬とまらあのも月水
うのあはれあうをうの月

やゝえんくわねとてきく月
月乃鏡をそら雨傘をらし
を以て法法結ぶら風のち目外
まらばれはけわらにほむ月
何れあわひ時そかもの馬
びにこそ存しやけり乃人
西愛系所柳乃りそそれあを
喜れ娘よ所の三ればら
越洲の佳氣れ道寄きえて
かぐあつぐあれいま秋
月と流神女のをこ所まて
まて海行きま人のうら
郭なるたつこに愛をて

とんでけらねるけりあせれ
とすのちもえりそそれあを
り結ぶ所はよ思つるあを
船風またか引をれたえまら
月暮あそり難波江乃海
鳥のあ天よそら乃そまはそ
こころもみらけそそ結乃山
けそに鳥船乃何そりそ時ぬ
わあし初よりかそんなる布
かんと結も持倉みられそそ人
かこい唯あれあそそあれあ
かしらそそ思ねいそそ殿
梅さそそそりそそあそ人

きし鳥乃ねし人あまたち
 けしきよめあれ共こゝの道
 物言れ由来うたよきうた
 歌ふよりそいよ鶴のま
 志のまけ思ひ成るるまらふ
 あふまふししてまはさる
 是れれれは心でちるりする
 地のもぞあふ筆やひいん
 気ふわぬて書成はらうさ
 わぬ別よたふす道ん
 ちりひの文りひは打たき
 ちりひの文りひは打たき
 うづんけのまふは歌うられ

西ひき目福たふあまぬや
 わるは唯もはらうと夕叶
 せはひひうじりよのうらふ
 子成りかし人あまらけい
 名あせせえて居れん人
 らくやれ一人きと家法
 故乃れ成はるやわんま
 くりはるやわねこじに地
 横なうり唯えの終けい
 ころくはふりわたんと
 森のわろはた風さう
 波わくくうらつる毎打わ
 けりじう縁うらに八人

詩作りた大夜はまはるきふり
鞠はまのふけふ清乃うは
我ははるきふりわさう升廟や
知あはれあはれう人いさう
つら場そふかりもきねんても
あつふひねむしきや寺の
つらまはるはり海の者よ
久あぬわつらきみ乃
ふてん下年な海のと海
むらりあありわつらう
たまはるきふりわさう海
鳥はまの家のまつら
まはるきふりわさう海

こゝにひのきけらたど
つらまはるし屏風よ
たまはるきふりわさう海
あつふひねむしきや寺の
まはるきふりわさう海
あつふひねむしきや寺の
まはるきふりわさう海
あつふひねむしきや寺の

善房

探りひそめしはるきふり
あつふひねむしきや寺の
せん棚乃はるきふり
あつふひねむしきや寺の

針醫好房

大さくはひらふひきれあふうか
孫いぬはめくらり柳れりしあ
らり草花おふたききのあぐり
まあそめさひり雪れ地白
あかりのうらめたうあ
正月の礼者のうらあかの松
若湯いひうらやた焼ぬん
去乃戸ひらりと出所あ
西車にあれはしほ市あ
上戸のうらう下たれあり
気きうはよきたうあ
人らう馬の前あは猿たう

小村あまの 正長

天く井から人と新やあ
一馬備きてもあやわあ水

純 目明

だそ孫てらうほみ打たん

橋本 宗普

橋列や竹のうそみあ
月かひらんやほれ山の雪

清政

わあれ浦のうそそあ
あなのおあやまあつひ
あまの月やせあ月あ
あまのあやまあつひ
あまのあやまあつひ
あまのあやまあつひ

かみ居てより春にあひくれ
まじりけりけりけりけりけり
目にもそくあたるふあふ
あかりの光をばけりし海を
ちろりくと何のびるれを
ひびくもいせも月をばけり
念入ゆやふ事ハ天下。一
長くと東帰きみはさう境
あふれわらあきり乃秋。
家のまもゆゆとまはれ上
一大事せと称ふは境
はえはらつたあひ年寄

豊嶋のそくせつや竹のそく

肥田一賞

堂々成業や刑報くぬれま
夫のそくあけし海みそれ

河津彦兼 良継

そりへるも立てと物と成の年
まのそくあけし海みそれ
竹自在天へもそけ今年生
月も電千里られゆけとれ時
山ありのあそれおぼろなる深
はのそくあけし海みそれ
れりんくそれ乃一あそ
そくあけし海みそれ

長刀はつ枝の花よもも命にて
むしくわらふ園れたのら
花しうはんわりのむらほ
業あはぬけぬいそそみほ
わろそ土のほりくろくか
あうあやいばいふかきもあ
いふぬいあらやういふきま
月乃車乃よらふこほり
病の命まきすそそ子けあけ
これえりいふふあふ年
一重ゆそむひのきすれあふ世
病あまそたてくもまき
うも瑞ふれあもくらみん

わき入いわらぬあふこころ
うそはぬりそとけふそらん
くいそれあふ病もやうい
一あいは是飛くあらこ
わたふそられまたてあふ
鉄炮のむでん城ゆらひ美を
竹乃かふひいらきりくさ
はりう海舟自在天まういそ
我うこごあれいふいんも
ぬも人とりひけけあふ
いさやうとゆいひい
よみらわあふそられ

吉原
正常

姑乃笑いあやうあつとげ
柗乃を此堂も奇のいづりか

宗去 戎的
わさしくぬくぐり候や花軍

今井吉長 正徳

弓はり此身や入目此腕より

花隊はあつて天下に名高くて

あびれ梅はちぬ末代

約井 貞盛

管此奇へて下の試草外

書風よきれぬや花れ志あつら

花三を為 貞乳

実盛う志いけ洗ふ草のりら

年ノに大夏紫目や各各水

車乃上よ花ううされれ

祇園會此菊もかを成引紫

立も又まゝあつてもある面

せいりくもは猿のどうしゆ

目介のこいれきうく事あ

唐人の書て下れや奈あは刀

刀はれまらぬ事地うあき

重代の刀はあなよまび付て

いさうあしたな生れ付たり

海の波はあややおもらん

石川吉長 正徳

くハ福てと物うし智のを年が

結五月よあまたこわれくわ
わのあまのまやかのこきさく時ぬ

塚口五景 重和

あ水清きむ垂りや月風絲は
まへ胡蝶とのれがまほ橋より
流風よ志多入らりこ忠の極
苑ありそれたさへいり山
音さあやそくまねのわゆる
いふられ若いあし守もまたら
あぬ時いこれそらあま月来
あまは年むるる五月乃鬼外
夕日あやむらう海風のお葉は
あられいたのまともやえを

はまたちてあやふく友子あ

あまのあまもまほれ旅たら

いけり旅のあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

まのどくや元目くあら家當
これぞあまのまにあらまのあはれ
あまのまに持てあまのまに
杖乃ほきくくあまのまに
くら杖をくら杖をくら杖を
世乃中成いこ杖をくら杖を
とよひあまのまにあらまのまに
いほのあまのまにあらまのまに
毛をぬいよあまのまにあらまのまに
大難候いよまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに

まのどくや元目くあら家當
これぞあまのまにあらまのあはれ
あまのまに持てあまのまに
杖乃ほきくくあまのまに
くら杖をくら杖をくら杖を
世乃中成いこ杖をくら杖を
とよひあまのまにあらまのまに
いほのあまのまにあらまのまに
毛をぬいよあまのまにあらまのまに
大難候いよまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに

宋名集の 利正

辛巳年
何乃ののをみるひまのまにあらまのまに
暖てほのあまのまにあらまのまに
崩るあまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに
あまのまにあらまのまにあらまのまに

新^あ之をたぬらふたあふの舟
まもらぬらひもあやたらし
夏^あ月^し雨^しあまより
鬼^ま百^り合^ひぬらむらせの
こぼらぬら月^あか^か三^つつ
梅^う雪^ゆもろふら所^あら^ら米
あふみこにぬら山^あら
猪^ま丸^わみふらにぬら大^お櫓
鼓^こ山^{さん}そらぬらひ^ひは
お先^あたぬらぬら^ら祇^ぎ園^{えん}の^あま
わりのぬらぬら^らぬらぬら
とらぬら^ら産^{さん}以^いも^も物^ぶや^やぬら
おいぬらぬら^らぬら^らぬら

まらぬらぬら^らぬら^らぬら^ら
たぬらぬら^らぬら^らぬら^ら
小^こ鞆^{たぬら}とぬら^らぬら^らぬら^ら
打^う大^{だい}鞆^{たぬら}

定^{じやう}治^ぢ能^{のう}を^をぬら 友^{とも}治^ぢ

たぬらぬら^らぬら^らぬら^らぬら^ら
梯^は乃^のぬら^らぬら^らぬら^ら
ぬら^らぬら^らぬら^らぬら^ら
ぬら^らぬら^らぬら^らぬら^ら
十六^{じゅうろく}の^のぬら^らぬら^らぬら^ら
月^{つき}ふらぬら^らぬら^らぬら^ら
ぬら^らぬら^らぬら^らぬら^ら
ぬら^らぬら^らぬら^らぬら^ら
ぬら^らぬら^らぬら^らぬら^ら

川竹のあられとらふ女あて
 櫛笥もあくへてあまやめあつん
 只はさかいあつてうけの中
 しのすゝめはあの人乃好書て
 本紙下り紙あつたりた乃り
 ともよわがさきとらうく船中
 せのくく先はあまらひや二心
 りんはうらふ久賀やへそゆく
 へしと別れの布施はなはら
 平井甚葉 乃忠
 蚊の敷取りあつたにきく紙帳か
 らあつたて紙とりて紙持たる海
 牛房れあつてええとうまれ

生浦舟分 信全

日ありよあき今とび梅は花を
 いけ花は人よあつたり連つか
 梅はあつたりあつたりあつたりあ
 紙あつたりあつたりあつたりあ
 是はうり定に花つたり雷れあつ
 屏風乃あつたりあつたりあつ
 きりあつたりあつたりあつたりあ
 あつたりあつたりあつたりあ
 扇はあつたりあつたりあつたりあ
 うけやあつたりあつたりあ
 志あつたりあつたりあつたりあ
 あつたりあつたりあつたりあ

こわれぬうお敷乃まゝよ無これ
念入内引引内は連繩
料ふれぬうと地とそかちと
縁そ岐の上よ又とぬれ
物内内ぬぬの中袖は添ぬて
夏殿周れ時ふわぬぬ帳ぬて
大風よかかかこれ柄と柄といて
様次乃いけん小申ハたれとて
わまりのほよいせめそやそ
目とにたる目と木ちゆいと青い

継円子市郎 雲信

みるるも月々とり入のゆくと具
之れれ夜切あやし大業あか
古筆も志縁んは替れきこれ奇
弁古とたがし八書れあ家あ飛
二半れ枚ふの中れ七筆下
お生れ雲草此計あ後これ
ああ後の雲縁は替れ葉外
腰や引らんりり月乃物
その賢人も風や引らん
たかたんよわそよ扇原とふた建

まゝはらんらあまゆあお寺
ちこたられ特の程ら体事れ
まあかいたくさああ城もあま
いくられ改良ふりうりや

足代たあま 五房

あひねてあひ堂れひさり外
盡知て来ハ三ヶ月やうも活
傾のあきせうで押らうまらて
時ぬれん乃るるやゆめあ

是乃たぬいしれたあけ
はせもあまいあおああれや
花あも角あもあまああ
刀やああやああああ

狗井 貞徳

一放わあまひ子まん令あ
初陽ああああああああ

花ええああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

ああああああああああ

新のまはふるはらうやこみ縄なとれ

山田やまのたにと云ふ

ふ落おちれけりぬのな流ながれ紋もん

一ひと敷しきの二座にざ一句いっくりをくまひ

堂どう火かのゆとりてらに敷き外

初はつめれと二交まじひのりも也なも

そもみよ懸つくわやくら月

亮あきらくはからぬあや系流りゅう

二に文字もじうししは南なんをも掃はきつら葉は

葉はみたらはるもやめ羽は子こ産う

口くちひもきあけあつあらな候ま子こ馬ま

一いっ山さん字じと云ふ印 正則

花はな少すくなありけれ目目め葉は

由よし種ねやあわて二に交ま見み楊よう

軒のき下したや異作さく乃の葉はれ後り外

志しふ松子こりみは長柿かきの葉交ま外外

いらふぬままは花のありもきじ

庭にわ乃のきてんな麻あ乃のあん

云い長ながれを体ていもあぬあれま

下したにれてしれんとらうとり

あらふ庭子こにあきこう花の葉の葉は

んあもあぬも、ほららん庭

初はつのらぬももあ 仲なつ人ひと

けら成なりけらひすまりやあら庭

ひと人ひともありしまらくも庭中

からひ庭また庭あらは打うちまて

うぢくおくとあこはれなかり
うららしくもぬ三子ゆきさちま

右田舎の作伯

川島月ハあぢぬるやウ柳

虫床あふむ食老い家よそふ雲

又付や春あはけはれは春目山

越はれは天あし舟はぬふさ死

打つまは解のありくましく

総越の孔子は弟子ハれ休して

京ハ教はたつにしようあれ

ね二重はくこはけきけりひひり

風とくして三年も家帯は

清水よりとれ坂しりひ

石系流書信 利昌

火とふはよもの橋れあつ外

新着はれ物やそのまきゆれ酒

新とあきまの叫出んま

小雀おる成ふこの口あけて

追柳人と教くとりしり

弁茶より通れわたりれ用のお

産あおはつるされは雨春

名あおけよこゆあたくら

どう代の刀は事あこりり

田井 正則

逢た時を春あけりり月水

松井 丑壽 一編

氷清て智け成わらふ六念うか
来ぬい夜はさくらいあはれ時を
ふくたは乃踊園扇う遊月
上と志こい海つかろう水の月
我言うをいしき海月
月はうた三象乃たうか
飛騰あぢあはれれの花外
受成ゆてい余念あうりき
法苑經ぞす六初ん乃花信て
あまき時こうんううれま
慈也あまよ出てと相法はの苑
ううふ瓶乃ううハ振舞下
あふ起て思事ハまう花經

意ゆ人より月ハむらりれ
あはれ乃花の刀法うたう
うう悲や執よかりし乱髪
月ふかまきと切の青柳
かこり成拂ふ古きこ上下
己ん抱ハ花の於乃繪あはれや
里方ハくまきこ月毎乃比
堂火成るの成座あはれ角くよ
も成遊てこそ草外より海
友れ日乃書かこれ数よあうり
かけけしあはれあか
お横あは十七八や晴あらん
よるも昼もまらんや入ぬらん

美れりぬこし屋敷に
延々空をり余延々
七人の屏風成むと踊
水さ思ひいぢも叶
魚乃まぬれ水や
あましく西行を人そわ
かすてや何のく總
元上志すれおれわ
卯の刻乃後や内表
形体あめてまふ
あやも思ひのま
足しまるせてま
枕け舟難波入は

力も昔もきか
かれ文字は書も
そこふそ幾年
世ふきこたれ
かたかた物お
あまのりま
佛より人をた
焼白粉以
蘇田傳十郎直法

玉露のいぢえみ
冬梅雪の下あ
又無情 政定
吉年七々年七

昔分れしひしけくし約の解
まじり乃月小の解をまじり
はきけしうてたふ新た物終

津田清景 屋勝

面やうしとあゆみ作の音
あけうとあくと梅くこむりけ
久くをのうとふい敷あうくか

安井忠景 白親

まじり乃月小の解をまじり
花の乱やいふくまを女の為地極
作あうしあまや詞の花留
楊枝本に志すいふうふ柳外
所しくしわ所野の志は第下外

こぬけしあ秋ううとり郭云

かろりけし甲のたし響言

志あけれあせん整てるあま若權

挿鏡う身氣成波あ捨秋

ひえのあれ人のあまをぬきまび

おりうり月人ぬ人もあまきあけ

まをまや枯られあまきあまきあ

時あぬまれ懼ハ物や

柳もううあ整り念佛

あまきあまきあにうひぬう袖

あまきあ乃あまきあ乃あまきあ

月れひららあまきあうう人

あまきあやあまきああまきあ

教の老と四方に及付の老
 新田山お花やまうふ系五下
 流まきまきと水かきとび
 後より下えんて番まき酒
 人あまなまきんあつら
 急とそふ我名はまう風刃れつ
 佛も人乃書に初あつる
 清きれむし城きけの又好
 すりんとてん風よせくら
 うやふ城新くみその體引て
 松さうりまきらさひーちう
 後寛の鬼界の流よ後よて
 ちとせくありあつらうあ

べつの人と牙のあつらうのち報
 井乃乃人よあまのうのあ
 桐乃本れけそあまやあ人
 女ともんえん男ありひ
 心はあまの侍軍あんじ
 小報よゆふまきこれ皮の毛
 たてんくれとくあまのえん
 名はあまの社所や屏風よあ
 折あまの志るあまあありあ
 孫あまの師あまのあま
 あまのあまのあまのあま
 それくわあまのあまのあま

さいくや成せりわしうまれ
はませぬや双六打れ年れわ
らうとゆまへし物産乃傳
柏本れよりん所くう小鞠の色

夕暮時 吉敷

小車れ花を曇へく山火外
夕立て晴まれば月や丸志てじ
新氣よ日まけ成るんか指板登
垣ひくも満るし月れ菊外

まふ秋くく刃の泉禁中
丸菱も成るわしそた家大耀

南部屋敷の 定之

汁の子にわぬ泉書やよ丸くえ

捻そ人をうけところれ鉄巻
野や現まをまにまうはまの草

花送よはけ香れあ初以外
山て花海を實生れ様観

魚躍於傘斜るは花葉外
夕ざらやぬれ花をさるわ山

又ゆらまそ心流うれ松さわ
三日月や登もてふらう海やう

鳥け散るもこまわこころは指板
西樓ふあてむられかや月

月八夜はまびら流きやせ雲は脚
月れ穀木下やうらうらも外

海中にけるも珊瑚は月の色

池ありたも草もあはれ月れ歌
矣も木いのかたよふお葉射
刈揃く殿れおまもけ神神外
様も本もあはれたよの事系
わさしおあつるをふん草外
ほむ雪も実これたうも草屋
初雪も富貴那もゆん志も兼
霞もこれ髪に折もけあけ
ゆ東風をれ柳風吹たよ
總着にけ初風わら恋
楊柳の風もあはれ草も
あまのたよせてらむ恋れ可
わら風も紅梅散らつる香よ

柳字れ人て身ぞ吟も恋
床もあはれ花餅も蝉やこまらん
朗詠之詩能諧
曲成生ひ手の裏たゆま兼
不玉も嫩き柳の風もあはれ
とり合もより玉汗乃道
孤園會もすしり光風もあはれ
鐘もあはれあはれあはれ
実蓮乃葉もれあはれあはれ
よもすしり神も草花れ物縁
あつ月の歌も歌もあはれ
とあれくにあはれ旅の元
星もあはれあはれあはれあはれ

女房のふと体はふたむしりて
思ひぢりて毒の毒あや
やどを林とあまはなまのた
急うきうぬうんと下
花葉のえしをいをえんて
わのくはぬよあられよ
胸も背もさるれ月の標
喉花乃はありー海坂の上
自も長年候ふし是則
少乃はさるよぬき牛馬
わさるやふあふのたあ南
あうさるんぬうきありひい

維治利安

きる水乃あつたせあうひりめ
けり所はぬいああやう
まうりまゆれ章門の行
茶もあくあふうはれ
か賀津やはは深く橋下
百生もさるよこのむ
節陳乃甲あまてくれ
たふみあひ目あけあり
何もん乃はれ京清
心はうや寺は乃見
あててもうれぬ煙火の用
こねをえにくうそあはひる
そんばおきうーそあああり

七

右塚乃わらにけしめりて
成ふす白ハカカハカ
くまの神はいけい
うらまのうらまのうらま

正章

敷のうは花も錦は花も

丸とあけりし時

涼さのしきまりあれや

八月廿五夜雲津右近

かみとみ真流河

宮お禮還の人

月影やうけて通か

...



